

こども計画策定時のアンケートや関係機関への意見聴取における主な意見

(1) こども計画アンケートより

- ① 子育て中の母親は孤独を感じることが多く、他の親子と交流や情報交換できる場があるのとないのでは全然違う。
- ② 第1子を生んだ後の不安なタイミングで大牟田市からの助産師の訪問で話を聞いてもらい、精神的にかなり助けられた。あの助産師に市を通していつでも連絡できると思ったら気持ちが楽になり、前向きになれた。
- ③ えるるのつどいの広場は狭くて室内のみで飲食もできないので、0歳から1歳までしか遊べない。
- ④ (言語聴覚士からの意見) 支援が必要な子どもを把握して、適切な環境に導く流れが不十分と感じている。診断や支援を求める保護者と、集団保育の中でどのように対応したらよいか分からない園の保育士からの相談が相次いでいる。特に未就学児に関しては大半が「様子観察と言われた」とのこと。
- ⑤ 発達に特性がある子ども、や自分の子どもが障害かも、と思った時に相談に行ける大牟田市の窓口があってほしい。馴染みがない場所には相談に行くにくい。病院に行くこと自体敷居が高い。

(2) 児童発達支援センター(りんどう学園)との意見交換より

- ① 養護児の判定を受けた子どもに対し、加配職員が子どもの特性に応じて適切な関わりができていのかどうか重要。養護児と周りの子どもを安全に保育することだけが目的となってしまうのは、本当の意味での養護児の支援にならない。保育所等において、発達が気になる子どもへの理解や対応力の向上をさらに進めていく必要があると思う。
- ② 発達が気になる子どもへの支援・対応を学ぶ職員・保護者向けの実習プログラム(ティーチャーズトレーニング・ペアレントトレーニング)について、近隣市では、保育所等においてティーチャーズトレーニングが近年定期的に実施されており、ペアレントトレーニングについても地域子育て支援拠点で実施されている。りんどう学園(日本厚生学園)では、ティーチャーズトレーニングやペアレントトレーニングの講師ができる人材が4名いる。ティーチャーズトレーニングを受講した人が講師になることも可能。
- ③ 保育士だけでなく、学校の先生もティーチャーズトレーニングを受講してほしい。
- ④ 保護者に対し、自分の子どもが発達に課題があることや支援が必要であることを理解してもらい、療育等に取り出してもらうのは中々難しい。

(3) 児童発達支援事業所との意見交換より

- ① 養護児の判定を受け、加配職員がついているケースであっても、朝から晩までマンツーマンで寄り添うというのは、子どもにとってはよいかもしれないが、保育士の負担が重いと思う。園によっては、入園時に「発達に特性が見られる時には療育支援を受けてみるようアプローチする」とあらかじめ保護者に伝えている園もあると聞く。とてもよい取組だと思う。
- ② 愛着障害を持つ子どもが増えてきた。端から見ると発達障害と症状が似ており混同しやすいが、発達障害は療育支援により一定の改善が見込めるのに対し、愛着障害は養育環境に原因があるため、基盤である家庭内の環境を改善しないと解決しない。
- ③ 1歳半健診や3歳児健診で子どもの発達状況を確認できる機会が設けられているものの、自分の子どもが発達に課題があると認めたくない思いから、自ら支援からすり抜けようとする保護者もいる。
- ④ 母親に余裕がないと感じることが多い。余裕がないと聞く耳を持ってもらえないため、日頃から顔を合わせて、少しずつこちらの言葉を聞いてもらえるような信頼関係を築きあげていくことが重要。
- ⑤ ひとり親の一人っ子という環境が一番厳しい。ずっと2人きりで他に頼る大人もおらず、どうしてよいかわからない保護者に余裕は生まれない。

(4) 発達が気になる、または発達障害のある子の保護者等の集まる場「りりあん」参加者からの意見聴取より

- ① 健診を受けた時に支援先を相談したが、「言語聴覚士を探してください」と言われた。自分で探さなければならないのかと感じた。
- ② 支援先は色々あると感じたが、点止まりになっていて線でつながっていない。まずはここに相談すれば、というような場所が欲しい。
- ③ 支援先が支援事業者一覧のような形で掲載されていても、診断を受けていなくても行っていいのかなどが分からない。「初見OK」や「診断を受けていなくてもOK」とか、敷居を下げてもらえるような配慮があると、心理的にも行きやすくなる。
- ④ りりあんのような場が継続的にあればいいなと思う。誰でもいつでも行きやすい場所があるとありがたい。